

問題を持つ子どもへのカウンセリング的対応を学ぶ

—気がかりな子どもの『心の危機』への気づきとその関わりについて—

高知市立旭小学校 教諭 西本 里美

1 はじめに

問題を持つ子どもとは、不登校・非行・学力不振・攻撃性・集団を乱す子どもなどである。それは、行動面に表れてから認識されることが多い。しかし、それまでに学校や家庭に対し、何らかのSOSを送ってきていると考えられる。不登校の例でも、学校に行けなくなるかなり前から、夜眠れない、朝むかむかして気分が悪い、頭痛などの身体症状をもっていたことが多いと言われている。

特に小学生の子どもたちの身体はいろいろな心の問題を敏感に感じ取り、それを何とか回避しようと、身体症状として表し、問題行動や日々のさりげない行動として現すことによって適応している。ここでいう行動とは、口から発せられる言葉や文章での表現だけでなく、言葉として表現されないもの（例えばしぐさや態度、顔の表情、作文や絵など）を含んだものとして捉える。

本研究の予備調査として各学級担任に聞き取りを行った結果、学級担任が「気がかりな子」としてあげているものは、表情のない子、冷めている子、視線が合わない子、自分を出せない子、何を考えているのかわからない子、反応がない子、覇気のない子などであった。このような子どもは、自己表現が苦手で、どうせ分かってももらえないだろうと考えている子どもが多い。ところが、学級経営をしていく上では早急には問題視されることは少ない。結果、関わり合いの上でも深いとは言えない。特に目立った行動も無く、勉強面でも問題がない「よい子」と写っている場合さえある。学級担任としては、“何か気がかりな子ども”という認識程度で留まっていることが多いように思う。しかし、この「気がかりな子」こそがその後のいろいろな心の問題の予備軍となっているのではないかと推測した。

そこで、本研究は、「気がかりな子ども」とは、どのような心理的傾向をもつ子どもかについて明らかにし、これをもとに「気がかりな子ども」への具体的なカウンセリング的関わりへと発展させたい。そのことが、教師の子どもへの関わりへの具体的な方法の提案になると考える。

2 研究目的

学級担任が「気がかりな子」と感じている子どもは、現在特に問題行動はない。しかし、その「気がかりな子」こそ、問題行動を起こす原点ではないかと考える。そこで、本研究では、「気がかりな子」の特性を分析し、どのような傾向が見られるのかを考察する。

3 研究内容

研究Ⅰ 母子画を使った調査

- (1) 調査対象：高知市立A小学校 3年生から6年生まで全員 計321名

調査時期：2005年11月

- (2) 手続き：クラスごとの集団形式で実施。その後母子画が特に気になる子を抽出し、1人10～15分の個別面接「話し合い」をもった。休み時間や給食準備中を利用し、特別教室で実施。

・ 教示の仕方 「お母さんと子どもの絵を描いてください。」

・ 注意事項 ①鉛筆で描く ②消しゴムは必要に応じて使用してもよい ③紙は縦書きでも横書きでもよい ④隣の人は見ないで描く ⑤棒人間は描かない ⑥絵の

上手・下手を見るのではないので丁寧に描く

- ・描画後の質問 ①お母さんは子どもに何と言っているか ②子どもはお母さんに何と言っているか ③何をしているところかの3点について裏に書いてもらう。

(3) 母子画の分析 (ここに提示した描画はイメージを変えない程度に修正を加えている)

印象分析を行い、7つのタイプに分類した。

- 1、不安
- 2、怒り
- 3、支配的
- 4、寂しさ
- 5、幼さ
- 6、楽しさ
- 7、白紙

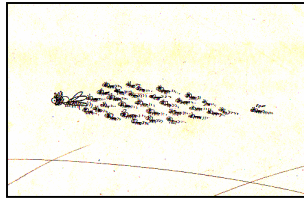


図1 不安

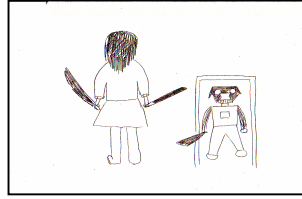


図2 怒り

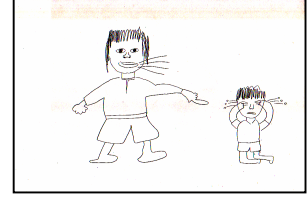


図3 支配的

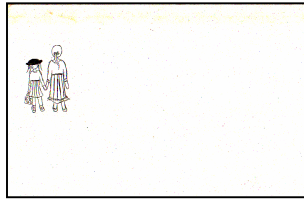


図4 寂しさ



図5 幼さ

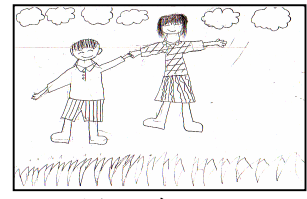
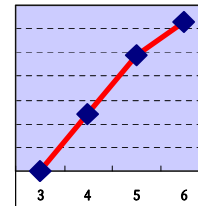
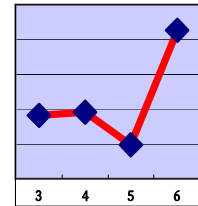


図6 楽しさ

楽しさが全体の65%と最も多かった。そして、「不安」11%、「寂しさ」8%、「支配的」7%と続いた。特に「怒り」は、学年が上がるとなると多くなる傾向が見られた。「不安」は、6年に急速に増える傾向が見られた。



怒り



不安

(4) 母子画からの考察

3年生に関しては、「幼さ」なのか、発達的な問題なのかの判断が大変難しかった。

3年生は、母子がすべて人間で表現されているのに対し、学年が上がるにつれ、動物、果物、魚や体の一部だけで表現する子どもが増えた。これは、学年と共に自分の思いを表現する手段を身に付けていくためであると考えられる。しかし、「母と子どものイメージ」をすんなりと人として表現できず、他のものに投影しなければ描けなかったのかもしれない。そういう子どもに、少し意識を向けることは必要だと感じた。

一生懸命考えたが描けなかった（「白紙」の）子どもや、このように描きたいというものを持ちながらも、実際には何度も消したり、描いたりしながらも描くことのできなかった子どもなどは、継続的に観察を続けていくことが望ましいと感じた。

描画後の「話し合い」の中で、自己防衛をしていると感じた子ども、話をどんどん広げていき、自分の世界に入って話をしてくれる子ども、思いは、絵には表れているが、言葉で表現をしようとすると、うまくできずに考え込んでしまう子どもなどに出会うことができた。しかし、子どもと面識がなかったり、どういうふうに話していこうかと考えてしまった子どもには、こちら側がこの子どものペースに寄り添って話を進めることがより難しかった。ここで、子どもとの関係づくり（ラポール）が大切になってくると感じた。子どもたちはどの程度信頼できる人であるか、自分を分かってくれようとしているのかなどを言動や態度から推測している。だからこそ、個別面接では「無条件の受容」や「共感」しようとする姿勢を持たなければならないと感じた。

次に、母子画の中に顔のない絵を描いた子ども（事例1・事例2）、横断歩道に立ち止まっている絵

を描いている子ども（事例3・事例4）と大変気になる母子画を描いた子ども（事例5）について分析を行う。

<事例1 6年A子…「不安」(図7)>

① 担任による分析

冷めたところが見られるが、勉強もよく理解し、「よい子」である。プライドが高く、ため口が多く、何に対しても投げやりな態度が見られる。

② 母子画の印象

親子は手をつないでいるが、あたたかさや仲のよさ、楽しそうな感じは受けない。顔が描かれていないことで不安や現実を見つめたくないような拒否があるように感じた。母親は堂々と正面を向いているが、危険「信号」が点滅しており、ふさがった空間の中で、子どもは不安そうにどこかを見ているように感じる。

③ 描画後の「話し合い」より

教示後、A子によると「親子のイメージというのは手をつないでいるということしか浮かばなかった。」「母親は、口数が少なく、甘えさせてはくれない。仕事が大変で生活に疲れている。子どもが話しかけても普段から反応はしない。」「この絵の母親は自分の母親ではない。」「子どもは、今日あったことを一生懸命母親に話している。」「子どもについては「勉強はそこそこで生活態度は良いが、親しみにくく近づきたい存在で、子どもは母親が好きだけれども甘えていない。」「この子どもは自分ではない。」「顔は、描きたくなかったので、違和感はない。」

母親によい印象を持っていないことを感じた。子どもは、母親に一生懸命メッセージを送っているが、母親はそれに応じることなく、無視を繰り返している。自分の母親とは違うというが、私には、自分の母親と重ねているように感じた。最初は警戒していたが、共感しながら聴いていくと、思ったよりもすらすら話してくれることに驚いた。

<事例2 4年B男…「寂しさ」(図8)>

① 担任による分析

やることが幼い。人との付き合いがうまくできず周りとのペースを合わせることが苦手である。自分の世界に入る。自分のやりたい時には、自我を通すところがある。

② 母子画の印象

しっかりと描いているのに顔を描いていないのが、この子どもの辛さなのかなと感じた。手がしっかりとつながれているのに、子どもが小さく後ろで引っ張られている感じや、つないだ手を大きく描いているところから、不安感や寂しさのようなものを感じた。

③ 描画後の「話し合い」より

B男によると「描画の母親は、やさしいがたまに怒る（片付けなどしないと）「～しなさい」とは言わない。」「子どもは、たまに怒るけど優しいので母親のことが好きである。」「この絵のイメージは、自分の母親と弟だ。」「本当は自分を描こうと思ったが、難しくて消してしまった。」「顔は描きたかったが、そっくりに描きたかったので、描きあげることは出来なかった。」

自分の母親と弟の間に本当は入って行きたいのに、じっと我慢をしているのではないかという感じを受けた。本人も母親のことが大好きで、弟のことも大切に思っていることが伝わってきた。顔を描かなかったことが、いけないことだと思っていたようで、表情が優れなかったが「それでもいいんだよ。」と言うことにより、穏やかな表情になり、笑顔で「話し合い」を終えることができた。

<事例3 6年C男…「不安」(図9)>

① 担任による分析

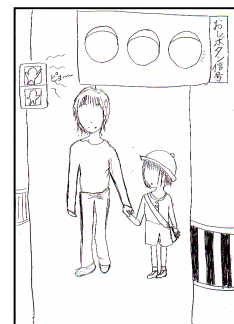


図7

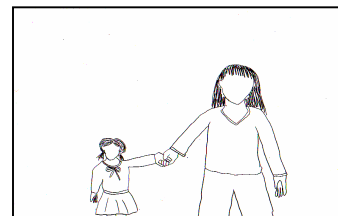


図8

教室では、目立たないがやることはしっかりでき、授業態度にも問題はない。自分自身を見せようとはしないので、本心はわからない。

② 母子画の印象

立ち止まっている子どもに対して、母親は怒りを感じ、子どもを見ようとはしていないところから、子どもは頑張って一生懸命なのに母親はもっと高い位置から子どもを見、母親のペースに合わせようとしているように感じた。しんどさややり切れなさを感じた。親子の会話も「早くしなさい」「うん」「待って」と記述されていた。

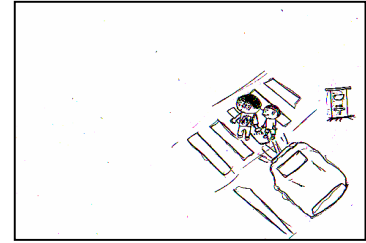


図9

③ 描画後の「話し合い」より

C男によると、「描画の母親は、おこりっぽくておそろしい。母親は子どものことを好きかどうかは微妙で子どものことをかわいがってはいない。子どもは母親のことをうるさくいたり、干渉するから邪魔に思っている。母親のことは好きではない。」「家に帰っている途中で、子どもはいろいろ言われて疲れている。反発もあり、立ち止まっている。」「母親は、クラクションを鳴らされて困っている。しかし、子どもは無言のままである。」「この絵の後には、母親が無理やりに手を引いていく。子どもは仕方なくついていく。家まで、お互い無言のままである。」「タイトルをつけるとすると、[母が引きずりそうになっているところ]。」「描画の母親は、自分の母親と全く違うとは言えず、一部似ているかもしれない。」

描画の母親は、自分の母親のイメージが強いように感じた。また、C男の普段の態度とのギャップを感じ、かなり自己防衛をしているように感じた。

<事例4 4年D男…「不安」(図10)>

① 担任による分析

おとなしく、クラスでは目立たないが、周りからは認められている。賢く、やらなければならないことはきちんとできる。調子に乗ったり、おちゃらけたりするところは見たことがないほど真面目。

② 母子画の印象

横断歩道で立ち止まって手を挙げているところから、子どもはギブアップ状態ではないかと感じた。親子の表情も明るく感じられずお互いに困っている状態と感じた。

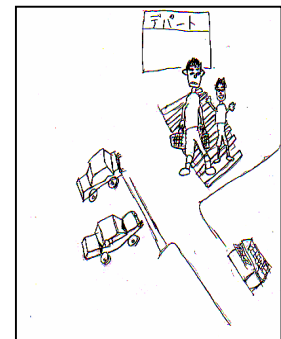


図10

③ 描画後の「話し合い」より

D男によると、「描画の母親は、子どもの言うことはよく聞いてくれるが、「～しなさい」とうるさく言う。」「子どもは、好きな物を買ってもらって嬉しい表情である。」「母親は子どものことは好きでも嫌いでもなく普通で、子どもは母親が優しいから好きである。」「描画の母親は、『～しなさい』というところが自分の母親に似ている。」「子どもは自分には似ていない。なぜなら、自分ははしゃいだりしないからだ。」「子どもはいっぱい買ってもらい、万歳をして喜んでいるところだ。」後で「なぜ、この絵のように、はしゃいだりしないのか」聴いてみればよかったと思った。

表情豊かで、にこにこまじめに答えてくれた。やはり、自分の母親像が強く投影されていると感じた。自分の家でも「～しなさい」とせかされている様子が目に浮かんできた。

<事例5 6年E子…「不安」(図11)>

① 担任による分析

やることはきちんとでき、学習態度も真面目である。内面が大人で、気分にはムラがあり、考え方がネガティブである。自分の考えを持っているが表面には出さない。

② 母子画の印象

何ともいえない不思議な世界という感じ。玉を大事そうに抱えているが、手が震えているように見え、不安定さを強く感じた。左手首にはカットバン、右には、傷のようなものがあり大変気になった。

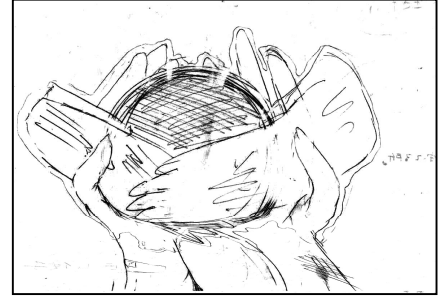


図11

③ 描画後の「話し合い」より

E子によると、「顔や姿は描きたくなく、手だけを描こうと思った。下の手は母親。手は母親のみであり、子どもは、丸い玉である。」「子どもから出ているのは羽。」「何をしているところでもなく、母親が子どもを持っているという感じ。」

「子どもは、まだ羽を広げてなく飛び立ってはいない。」「なぜカットバンが貼っているかは分からない。」「どんな母親かは考えたことはない。人間であって、人間でない。この世のものであってこの世のものでない。」「子どもにとって、母親はいるようでいない人。」「子どもは母親に対して、期待や安らぎは求めている。」「子どもは、まだこの世に誕生していない。」「母親のイメージは、あまりない。」「私が、不思議そうな顔をしていると、「玉が生徒で、手は机というイメージ。」とたとえば言う。「玉はこっち（母親）を向いている。玉を黒く塗ったのは、白は純粋な感じで嫌だったからで、黒は、水や月という感じ。」「母子間に会話はなし。言わなくてもお互い何となく分かり合える。」

本当に独特の雰囲気で、私自身呑み込まれそうな感じであった。何ともいえない空間になっていた。自分の世界を一生懸命詳しく説明してくれた。私が考えていると、「どうせ分かってももらえないことだから」といつてきた。時間をかけながらも自分なりに感じたことをぶつけて、理解できないところは伝えていった。それに対して、また一生懸命説明してくれた。私が時間を気にしても全然気にせず、もっと話を聞いてほしい感じであった。私自身は、十分に理解できないまま終わったという感じと何ともいえない疲労感が残った。しかし、E子はすっきり、満足した様子で笑顔で行った。子どもの話を聴く時の「無条件に相手の世界を受け止めること」の大切さを痛感した。

(5) 「話し合い」からの考察

「この絵の親子のことについて話をしてほしい」ということを伝え、絵に二人で入っていくように心がけた。指導は、一切いれずに、できるだけ言葉を選び、言葉がけを控えめに、間を取りながら子どもの想像が膨らんでいけるように配慮した。一見、同じ印象のように感じていた母子画でも「話し合い」をすることにより、子どもたちの思いは随分違っていることが分かった。印象分析だけでは、子どもたちの内面に迫るには限界がある。だからこそ、担任にとって、その後の子どもとの「話し合い」の中で、子どもの絵の中にも入り、その世界を共有することが何よりも大切であると感じた。

研究Ⅱ 『心の危機』への気づき尺度による調査

- (1) 調査対象：高知市立A小学校 3年生から6年生まで全員 計321名

調査時期：2006年1月

- (2) 手続き：尺度作成に当たり、①担任からの聞きとり ②今まで関わった先生からの聞きとり③専科の先生からの聞きとり ④私自身の表情観察 を行った上で、項目を作っていた。

- (3) 『心の危機』への気づき尺度の作成

表1に示されたように、まだ行動に表れていない『心の危機』への気づきを5つの側面から捉えることが可能であった。その5つを因子別にグラフ化したものが図12である。

- ①6年は他の学年に比べると、どの『心の危機』も高く、心理的にしんどさが蓄積されていくのが6年

である。

- ②3、4年は「分かってほしさ」が高く、もっともっと聞いてほしいと感じている。
- ③逆に、5、6年から聞いてほしいと言わなくなり、6年になると「対人的あきらめ」へと移行する。これは、初めから期待せず、距離をとりながら付き合い始める、自己防衛の仕方ができてきたからだとも考えられる。
- ④愛着不足は、5、6年生が急速に増え、土台（親との関係）が不十分であった子どもが、高学年になるにつれ、エネルギー切れになると推測される。

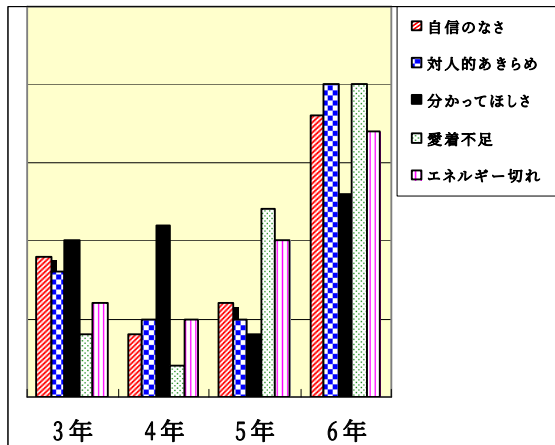


図12 『心の危機』レベル

(4) 安心できる居場所と『心の危機』への気づき
居場所のあるなしについて表2下□内の質問を行った。

(別紙資料1－2の27・28項目)

- ①「自信のなさ」と「分かってほしさ」は、居場所のあるなしに関係がない。
- ②「対人的あきらめ」と「愛着不足」は、居場所が「学校・家ともにある」子どもは低く、「学校・家ともにない」と高い値を示している。
- ③「エネルギー切れ」は、居場所が「学校・家ともにある」子どもは少なく、両方にないもしくはいずれか一方にしかない子どもは高い値を示している。

表2 安心できる居場所と『心の危機』への気づき

	1	2	3	4	F 値	
自信のなさ	1.93	2	2	1.9	0.27	
対人的あきらめ	1.7	2	1.8	2.1	11.01	***
分かってほしさ	1.82	1.9	2	1.8	2.56	
愛着不足	1.33	1.6	1.7	1.9	10.79	***
エネルギー切れ	1.72	2	2	2	6.37	***

***p<.001

1 学校・家ともある 2 家だけにある
3 学校だけにある 4 学校・家ともない

(5) 「母子画」・『心の危機』レベル・「安心できる居場所」を総合して

高学年X組の調査結果を示したものが表3である。この表では『心の危機』レベルが高いが、教師が気がかりであると感じていない子どもを取り上げ、以下に検討を行う。

<事例1 Aさん>

「対人的あきらめ」が高く、「分かってほしさ」「愛着不足」「エネルギー切れ」も比較的高い傾向にある。居場所は学校だけだ。しかし、教師の目から見れば、「きちんとできる子」である。何よりも気になったのが、母子画であった。多数の虫で表現しており、虫のような存在の背景には、いじめなどがあるとも言われている。最後に必死で母親においていかれないようについでいこうとしている小さい虫が、自分自身であるとも考えられる。他にも小さい虫がたくさんいる。これは、自

分自身を増やすことで不安を打ち消そうとしているのであろうか。親は、子どもを必死に引張っている。これが、子どもにとってはしんどく、「そんなには、無理だよ」と言っているようにも感じる。

<事例2 Bさん>

「自信のなさ」「対人的あきらめ」「分かってほしさ」「愛着不足」「エネルギー切れ」のどの値も高い。居場所もどこにもない。しかし、教師から見れば気がかりではない。このような子どもの『心の危機』を感じるためには、どのようなアンテナを持ち、チャンネルを合わせていかななくてはならないのか、次への課題が見えてきたように思う。ゆっくりと話してみたいと思った。

名前	自信のなさ	あきらめ	分かってほしさ	愛着不足	エネルギー	母子画	居場所
	2.1	1.2	1.5	1.5	1.5	8.0	1
	1.0	1.6	1.3	1.0	1.0	8.0	2
Aさん	1.6	2.4	2.3	2.0	2.0	1.0	2
衣	2.1	1.8	1.8	2.0	2.0	1.0	1
	2.0	1.4	1.5	1.5	1.5	5.0	2
	1.7	2.0	2.0	1.5	2.5	8.0	1
	1.7	1.2	1.0	1.0	1.5	8.0	1
	2.3	2.6	2.3	1.0	2.5	5.0	2
	2.0	2.2	1.5	2.0	2.0	8.0	2
	2.3	2.0	1.8	1.0	2.0	8.0	1
	2.7	2.6	2.0	2.0	3.0	6.0	4
	2.4	2.2	1.8	1.0	2.0	8.0	2
	2.1	1.4	2.0	1.0	2.0	8.0	2
Bさん	2.3	2.6	3.0	2.5	3.0	8.0	4
	1.4	1.2	1.8	1.0	1.5	8.0	1
	2.6	1.6	1.5	1.5	1.5	3.0	4
	2.0	1.6	2.0	2.0	2.0	8.0	1
	1.7	1.8	2.5	2.0	1.0	1.0	1
	2.1	2.6	2.0	2.0	3.0	3.0	2
	2.0	1.8	1.8	1.5	2.0	1.0	1
	1.4	1.6	1.3	1.5	2.5	4.0	1
	2.6	1.4	2.5	2.0	2.0	8.0	2
	2.9	2.0	2.5	1.0	3.0	5.0	1
	2.0	1.8	2.0	3.0	2.5	8.0	2
Cさん	2.5	2.2	3.0	2.0	1.5	8.0	3
	1.4	2.4	2.0	2.5	3.0	5.0	3
	2.1	2.8	2.0	2.5	3.0	1.0	1

<事例3 Cさん>

「自信のなさ」「対人的あきらめ」「分かってほしさ」が高く、居場所は家にはなく、学校だけにしかない。しかし、教師にとっては気がかりよりむしろ優等生であり、一生懸命適応しようとして頑張っているのであろうか。弱音を吐くこともできず、真面目に頑張っているように感じた。

(6) 『心の危機』への気づき尺度からの考察

尺度からは、子どもたちなりに一所懸命頑張っている姿が見受けられるが、それが過剰適応になっていないかに気を配る必要性を感じた。適応していると、学級経営をしていく上では、問題を感じることはない。しかし、その子が心では悲鳴を上げているのに、それでも真面目過ぎるが故に、「よい子」でいたいがために無理をして、自分をぎりぎりまで追い込んでいく傾向があるように思う。そのような子どもに対してこそ、教師の早期の気づきと関わりが必要であると感じた。

4 まとめ

どの子も適応しようとして、一生懸命頑張っていることがよく分かった。そして、親や教師の期待にも応えたいと思っている。自分の限界を超えており、しかし子どもは自分ではそのことさえも気づかず、またしんどさをどのように表現すればいいのかもわからないことが多い。うまく伝えることができない場合、あきらめて心にためてしまう傾向がある。学級担任も「気がかりな子」を気にしていないわけではない。しかし、一斉指導をしていく上では集団を乱したりしない限り、何を気がかりと感じているかまで探求できずに過ぎていく。その気がかりこそ、将来の心の問題の原点であることが示唆された。

こうした『心の危機』を抱える子どもの場合、これまで言われてきたように、単に居場所があればよいのではなく、あちこちに自分の居場所がある場合救われることが明らかにされた。教室だけでなく、保健室や図書室なども今後は大切な居場所の候補となってこよう。家にも地域にも居場所づくりをしていくことが必要であろう。これは、学校だけの問題ではなく、地域との連携も不可欠になってくる。

また本研究では、母子画とアンケート調査により、日常の行動では見えない子どもの『心の危機』に気づくことを目的としたが、こうして把握した子どもの『心の危機』は、次の学年にあがる時の財産として、共有することに意義があると考えます。中学校でも同じように小学校での『心の危機』を知りたいと思っている。しかし、それはその子どもを評価するためのものではなく、理解し、関わるための情報・財産として共有していかなければならない。そのことにより、「よい子」だったのに…とか、目立った問題はなかったのに…突然、不登校になったとかいうことの歯止めになるのではないかと考える。